
傷だらけの鏡

遊佐一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷だらけの鏡

【Zコード】

Z7868A

【作者名】

遊佐一一三

【あらすじ】

偶然会った「高校時代に憧れていた彼女」は、昔のままの彼女ではなかった。自分らしく生きることと、好きな人に合わせること。どちらを優先させればいいんだろうか？ 淡い恋心が痛みを伴う傷に変わる。かなわなかつた恋の物語。

「高田くん？高田くんでしょうか？」

まだらな金色の髪をした、疲れた表情の女性が立っていた。
僕よりもずっと年上に見える。

記憶をたぐり寄せて、一人の女の子を見つけだした。
あまりに変わってしまったけれど、あの頃憧れた彼女だった。

流れるような黒髪が、制服のシャツの襟の上で揺れる。

僕はそれを見つめているのが好きだった。

不自然に脱色した茶色い髪が流行している中で、
彼女の自然な黒髪は、かえって人目を引いていた。

同じ髪型、短いスカート丈、たぶついた白いソックスの群れの中で、
僕は容易に彼女を見つけることができる。

混じつて埋もれることに興味のない潔さが、僕の心を惹き付けた。

一度、彼女に尋ねたことがある。

皆と同じようにしないでいても、不安になつたりしないのか、と。

「私は私で、このままがラクだから。」

彼女の答えは、彼女の生き方そのままで、実にシンプルで潔かつた。

吉岡沙希とは、高校一年の時に同じクラスになった。

女子特有の「群れる」習性を持たず、いつも独りで行動していた。
特に仲間はずれにされているというわけではなく、
ただ独りでいるほうが気楽だから、といった風だった。

クラスには、素朴な美貌を持つ彼女に想いを寄せている同級生もち
らほら存在した。

僕は彼女がきれいだとかスタイルがいいとか、そういうことよりも、

彼女の存在感に興味を引かれていた。

成績は中の中、顔も十人並み（もしかしたらそれより下かもしだい）、とにかく、とにかく際だった特技も個性もない僕にとって、孤高の彼女は憧れだった。

雑誌の「もてる男」特集を読みながら、髪の色を変えた方がいいかとか、眉毛を整えたら印象が変わるだろうかとか、ささいなことに気を取られてしまう自分が嫌いだった。

「私は私」と言える「自分」を、僕は持つていなかつた。

沙希に彼氏がいることは知っていた。

目撃情報によると、美女美女でお似合いとはいえ、沙希とは対照的に「今風の男」なのだそうだ。

「今」を青春時代としているはずの僕たちが「今風」というのもなんだかおかしいが、たぶん、テレビに出ているアイドル風の「チャラい」男なんだろう。

嫉妬の混じった想像は精神衛生上よくないので、沙希の彼氏のことは考えないようにしている。

でも時々、沙希がその男とどんなことをしているのか、

妄想してはジタバタと藻搔いた。

卑猥なイメージが頭の中をよぎるが、経験が皆無な僕には微細なところまで

想像が及ばず、それもまた自己嫌悪の原因になるのだった。

僕の悩みはいつもくだらない。

「高田つてさ、なんかやぼつたいカンジだよな。」

友達にそう指摘され、どうやつたら「アカヌケた今風」になるのかを、夜を徹して考えた。

沙希の彼氏を参考にすれば、ちょっとは見栄えが向上するだろ？
いや、たぶん、間違いなく、ダメだろ？

元が違う。

僕の場合、磨けば光る原石ではなく、磨いても変化のない路傍の石。
でもここで諦めれば、「やぼつたい」まだ。
磨けば泥くらいは落ちるだろ？

僕はなけなしの貯金をつかんで、美容院に向かった。

美容院というのは、緊張する。

なぜなら、僕は子供の頃から、「男は床屋だ」と教えられて来たからだ。

美容院は女人の人があしゃれをする場所。

そして、母親でも数ヶ月に一回しか行けない、セレブの店。
子供の頃からのすり込みで、足を踏み入れるのに非常に勇気を要する。

えいやつと気合いを入れて店に入り、上手そうな年輩の美容師さんに頼んで、

「今風の」髪型を指定した。

不安でいっぱいだった僕は、帰る頃には、後悔でいっぱいになつた。
この状態を正確な表現するなら、「金をかけて悪化させた」ということだろ？

年輩の人に頼んだのが悪かったのかもしれない。

オシャレの最先端は常にワカモノだ。
いや、言い訳は男らしくないか。
悪かったのは、素材なのだ。

帽子でも持つてくれれば良かつた。

現状より悪化するとは想像もしていなかつた僕は、
そこまで頭が回らなかつた。

お金を遣つてしまつたから、しばらくはカラオケさえ行けない。こんなアタマのために。

明日は学校で、間違いなく笑い者にならうだろ。激しい後悔と絶望の渦に飲み込まれていたが、その悩み自体も客観的に見れば実にくだらない。さらに自己嫌悪が深まつた。

今は絶対に、学校のヤツと会いたくない。

「神様どうか、知り合いに会いませんように。」

何度も心で祈つたのに、僕の神様は留守だつたようだ。一番会いたくない人に会つてしまつた。

孤高の美女、吉岡沙希に。

「高田くん、そのアタマ・・・。

「変、かな？」

「うん。失敗したジャニーズ系つてかんじ。」

せつくりと、トドメを刺された。

遠慮も気遣いもないのが、いつもながら潔い。

ここで「そんなに変じやないよ。」と氣を遣われたら、かえつて「嘘言うなよ！」とキレてしまいそうな気持ちだつたので、素直な答えに、逆に安心した。

「誰かの好みに合わせたわけ？」

「誰かのつてわけじゃないけど、うーん、世間に？」

「アホだね。」

直撃。

「うん、アホだと思つ。自分でも。」

しょんぼりした僕の気配を察してか、それ以上の攻撃は来なかつた。「誰かとか世間とか、そういうのにウケようとするから、つらいんじゃない？」

そんなのわかってる。

だけど、努力せずにそのまましていて、誰かに受け入れてもうれしいと思ふほど、

僕は自分に自信が持てない。

いや、努力していたとしても、自信は全く持てないのだけれど。つまりは、無駄な足掻きをしている方が、冷静かつ客観的に自分を分析するよりも、気が紛れるというだけのことなのだ。

「吉岡の彼氏は、そのまんまの吉岡を認めてくれてるんだな。」「羨ましいよ、というニュアンスで行ったのに、沙希の表情は暗くなつた。

「相手の好みに合わせようと想わないのは、愛情がないってことなのかな？」

「え？」

「好きだったら、相手の好みに合わせたって想うもの？」

沙希の好みに合わせて、沙希が僕を好きになつてくれるなら、僕は力一杯努力すると思う。

でも、「努力して作った僕」を好きになつてもうつたところで、それは「本当の僕」なんだろうか？

努力しなければ好きになつてもうえないとしたら、それは本当に「好き」なことにはならないかも知れない。

僕は頭の中は、ぐるぐると混乱した。

僕には自分がないから、「作った僕」が不安なのかも知れない。

見栄えを多少いじつたところで、中身は変わらない。

要するに、中身を好きになつてもうえの自信がないのだ。

「吉岡の彼氏はさ、吉岡の中身が好きなわけじゃん？」

「そうなのかな・・・？」

「彼氏を僕は知らないから、わかんないけど。そうだとして。」

「うん。」

「たとえば髪型とか格好とか、そういうものを変えても、吉岡自体は変わらないわけだからさ。彼氏の好みに合わせて、喜ばせてあげるのもいいかもしないよ。」

「そういうの、なんかイヤなの。このまんまで受け入れて欲しいって思うのは、ワガママなのかな？」

僕が彼氏だったら、そういうナビ。

吉岡の彼氏は、吉岡に変化することを懇求できるほど、自分に自信のある男なんだ。

「喜ばせてあげようと思えないのは、やっぱり好きじゃないからなのかな？」

沙希は、僕の答えを待っているところよりも、自問自答しているようだった。

「僕はさ、彼女とかいたことないから、よくわかんないナビ。」

沙希が顔を上げた。

「好みに合わせるのがイヤって気持ちと、喜ばせたいって気持ち、どっちが

強いか天秤にかけてみて、自然に傾いた方でいいんじゃないかな？」

「そうかな？」

「吉岡だって、相手のここがイヤってここ、あるだろ。

変えて欲しいって思つて、相手が変えたくないこともあるかもしない。

お互にそういうの、妥協しあって、信頼関係つて作るんじやないの

？」

「高田くん、意外とオトナの意見・・・」

「まるっきり部外者だからね。冷静なの。レンアイに対して。」

深く頷かれて、それはそれでちょっとムカついたけど、

「参考になつた。ありがとう。」と明るい表情で言われたから、僕の機嫌はすぐに直つてしまつた。

僕の中身は、実に単純にできているなと思う。

僕と沙希が学校以外でしゃべつたのは、その時だけだつた。

特にこれといった変化もなく、時だけが意味もなく恙なく流れてい
き、

僕は相も変わらずやぼつたまま、受験生になつた。

沙希が学校を辞めるという噂を聞いたのは、高三の夏だつた。妊娠して、結婚するという話だつた。

その事實を耳にした時は、さすがにショックだつたけれど、「告白じよう」と思ひほどの募つたわけでもない恋心は、受験の忙しさに紛れて、時間とともに風化してしまつた。

最後に学校で見た彼女の髪が、明るい茶色になつていて、彼女は彼に会わせることを選んだのだと、ぼんやりと思つた。

僕は中の中レベルの大学に進み、相変わらず平凡な日々を送つている。

あの頃欲しかつた自信は、今もまったくつく様子が見られない。そして彼女は、平凡な僕とは違つて波乱の時を過ごして來たのだろう。

でも、あの頃の自信も輝きも、もはや宿つてはいなかつた。

彼女の手首には、白く残った傷跡が、無数に散らばっていた。
そしてその白い跡の上に、真新しい赤い筋が、幾重にも重なっていた。

「彼に合わせて自分を殺すのは、やつぱりつらかった？」
「愛されたかつた。愛したかつた。でもダメね。
努力でなんとかなるレンアイじやなかつたんだと思つ。」
痛んだ前髪を、無造作に搔き上げながらつぶやく。

「髪……」

「え？」

「黒い方が、良かつた。」

彼女の瞳を、真っ直ぐにじつと見た。

「私は私、つて言い切れる、強さが僕も欲しかつた。
それがあつたら、あの頃僕は、君に告白できただろう。」

あの頃の僕は腰抜けで、君に好きだなんて言えなかつた。
今の僕もやつぱり腰抜けで、傷だらけの君を受け止めてあげられる
ような

大きな器を持ち合わせていない。

彼女は僕を映す鏡。

無力な自分を思い知る。

「急に声かけてごめんね。私、高校途中で辞めちゃつてるから、
昔が懐かしくつて……。」

声がかされる。

「あの頃からやり直せたらつて、ずっと思つてて……。
でも時間は戻らないのだ。」

意味もなく恙なく、緩慢に流れていると思っていた時間も、
実は後になって、すごく貴重だったことに気がつく。

「高校生じゃない今の吉岡が、吉岡らしく生きらればいいんだよ。」

そして、高校生じゃない僕も、僕らしい何かを、そろそろ見つけなければいけない。

自信の源になる、何かを。

「高田くん、ありがとう・・・。」

涙目になりながら去つてゆく沙希の後ろ姿を見ながら、僕は自分を責めた。

好きな誰かに取り入るための努力なんて、しなくてもいい。必要だったのは、好きな誰かを守るための努力だったのに。彼女が彼女らしくいられる居場所を、僕は作つてあげられる力がなかつた。

好きだと告白する勇気さえなかつた。

先回りして何もかも諦めて、言い訳ばかりしていた。何もせずに。

淡い恋心の思い出が、心の傷に変わる。

君が好きだつた。

君を守つてあげたかつた。

心に刻まれた後悔を、繰り返さないために。

僕はこの、行き先もなく平らな日々のなかで、無為に過ぎすのをやめようと思つた。

変化は作るもの。革命は起こすもの。

時間の流れが、少しだけ変わつた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7868a/>

傷だらけの鏡

2011年1月28日14時55分発行